

# 独立行政法人国立病院機構 附属看護(助産)学校

## 令和8年度 入学者選抜試験問題

### 国 語

実施日時：令和8年1月20日(火) 9:00~9:50

\*下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

#### 〈注意事項〉

##### — 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記3つの記入欄がある。その説明を読み、3項目の全てに記入する。
  - ・ 受験校欄 受験校を記入する。
  - ・ 受験番号欄 受験番号を記入する。
  - ・ 氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を左詰めで記入する。

##### — 開始後 —

1. 問題は2ページから16ページまでの各ページに印刷されており、第1問~第2問の2題で構成されている。  
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答は全て解答用紙の所定の欄への記入によって行う。たとえば、

1
---

と表示のある問いに対して②と解答する場合は、次の〈例〉のように解答欄に2と記入する。

#### 〈例〉

	問1				
	1	2	3	4	5
解答	2				

3. 訂正は、消しゴムできれいに消し、解答用紙に消しくずを残さないこと。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後の途中退室はできない。

受験番号				

※左詰めで記入する

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

皆さんは、いまが夢でないかと証明できると思いますか。また、絶対に疑うことのできない真理があると思いますか。

デカルトは「ある」と考えました。この考え方は「我思う故に我あり」という言葉とともに広く知られています。私が何かについて考えている間は、私が存在しているというのを疑うことができない、ということを表示しています。たしかに、私が本当は存在しないのではないかと疑っているときにさえ、その疑っている私は存在しています。私が存在していない状態を想像する場合も、たいていは、私の姿かたちをした人がこの世からいなくなるころを想像しているだけで、想像している「私」は空中から俯瞰的にその状況を眺めているのではないのでしょうか。

それにしても、この結論は「アロウホウなのでしょいか。「絶対に疑えないものなんてあるのか」という問いに対して、( a )、「愛」とか「友情」、「お金(は絶対に裏切らない)」とかを期待していたのに、「私だけ」なんて、ちよつときみしい気もします。ただ、デカルトが疑えないものを探す思考に導かれたのは、本気でいまが夢かもしれないと疑ったからではありません。そうではなく、あらゆる知識の土台となるものとして、絶対に疑うことができないものを見つけようとしたからでした。どちらかといえば、日常の知識の正しさを守るためにあえて疑っていき、一番確実な土台を見つけようとしていたのです。そのため、デカルトがこの命題以外を真理でないと考えていたわけではありません。《1》

※さきほどご紹介したデカルトの考え方のプロセスを少し俯瞰的に見てみましょう。ここでは、第一に、最も確実な知識をいくつか手に入れ、第二に、見つかった確実な知識から新しい知識を導き積み上げていくという方法がとられていました。「正当化」という言葉を使うなら、確実な知識をもとにして、つぎの確実な知識を正当化していくとされています。

このような考え方は「A基礎づけ主義」と呼ばれています。知識にはその確実性によってランキングがあり、より確実なものの方が知識としてより基礎になっているという考え方は、皆さんはどう思われるでしょうか。私たちの知識の中には、全体の土台になるような基礎的な知識があり、それらを根拠にして他の知識が積み上がっていく。言ってみれば、根拠の「イレンザ」には順序があつて、その底にはすべての知識の土台となる知識がある。そんな風になっていると思いませんか。仮に基礎的な知識があるとすると、それはどのような知識なのでしょうか。

知識の土台になるのは、デカルトとは違い、私たちが感覚を通して経験することなのだ、と考える人たちもいました。たしかに、「私にはいま白いものが見えている」ということは、基礎となる知識の候補になるように思われます。私たちが知識を得る時に感覚などの経験を利用することは至って普通のことでしょう。デカルトが基礎づけ主義を採用し、その最も確実な知識の土台として「考える私」を置いたのに対し、この立場では土台として「経験」を置くだけです。

このような考え方をもとに経験論や経験主義などと呼ばれる哲学が発展してきました。経験主義が現在の自然科学の研究法と親和的であることは容易に見て取れることかと思えます。つまり、様々な実験を行い、その観察の結果を積み重ねていくという方法です。

みなさんは、真実にたどりつくためにどのくらい経験を重視するでしょうか。頭で理性的に考えることのほうが確実に真実に近づく方法だと思えますか。それとも、経験やそれ以外のものが必要なのでしょうか。《2》

私たちが知識にたどりつくためには何にたよればよいのでしょうか。みなさんが最初に思いつく答えは「B科学」かもしれません。現代社会における科学の影響力は非常に強いものです。何らかの信念が「科学的でない」とか「非科学的だ」ということになれば、それは真理や知識の名に値しないものだと思われるほどです。逆に、「科学的証拠がある」と言われてしまうと大して確かめもせず正当化されたと思いついてしまう傾向もあります。

しかし、なぜそんなに科学は正しいのでしょうか。学生にこのような質問をすると、実験や観察をして結論を出しているからだ、という答えが出てきます。(b)、有名な雑誌(「Nature」等)で論文が審査されているから、といった少し詳しい答えも聞かれます。たしかに多くの科学、特に自然科学と呼ばれる諸分野で実験や観察は欠かせないものですし、「科学的な仮説が実験によって確かめられた」といった言い方をすることもあります。何かの現象に対して仮説をたて、それを(u)ケンショウするために実験を繰り返しデータをとり自然法則を明らかにする。《3》

ところで、この一連のプロセスには、いわゆる(e)キノウ的推論のプロセスが入っています。そのため、絶対確実というわけにはいきません。ある法則が成り立っているという仮説を立てて実験を行ったとしましょう。実験を一〇〇回繰り返し、すべてでその法則通りになったとしても、「その法則がいつでもどこでも必ず成り立つものである、疑いなく成り立っている」とまでは断言することはできません。その一〇〇回がたまたまである可能性もあるからです。

明日には X かもしれない、というわけです。

なんだかうがった見方ですね。皆さんはどう思われますか。《4》

ただ、科学が正しいと私たちが信じている理由が、科学的知識が絶対確実であることが実験や観察によって証明されているからだ、というものであるならば、ここには重要な問題が隠れているということになるでしょう。

しかし、私たちが科学を信じている理由は、別のものかもしれません。「反証主義」と呼ばれる立場の人たちは、科学が他のものから区別されるのは、科学には反証可能性があるからだ、と考えました。《5》

反証可能性とは、ある事柄の反対が証明される可能性のことです。ある法則があったときに、それが科学的なものであるか否かは、その法則に反する事例(反証)が見つかる可能性があるか否かによって決まる、と考えます。

ポイントは二つあります。一つは、その法則が科学的であるかどうかは、それが確かめられているかどうかでは決まらないということです。(c)、「科学であるならば絶対確実であることが証明されている」わけではないのです。もう一つは、反証が実際にされているかどうかではなく、その可能性があるか

どうか重要だという点です。たとえば、「血液型によって人々の性格が分かる」という考えは、様々な調査によって偽であると反証されています。ある意味では、反証されたのですから、この考えは科学的仮説、間違いだと分かった科学的仮説であると考えることができます。しかし、そんな調査とは関係なく血液型占いは存在しつづけるでしょう。このとき、まさにこれは占いであって科学的仮説ではないということになります。占いに反証可能性はないのです。この考え方はいわば中身ではなく方法論によって科学とそれ以外を分けようとするものです。もしこれが正しいなら、知識を得るための正当化として科学的方法論を採ることは良いアプローチとなるでしょう。

一方、科学が他の各分野と比べて（甲）な地位を占めるわけではないと考える立場もあります。「パラダイム」という概念をご存知でしょうか。パラダイムというのは、その時代や分野に支配的な考え方やその枠組のことを指しますが、元々は、科学研究に関して提出された言葉でした。科学研究を行う際にもその時代ごとに支配的な考え方があり、それをもとに科学者は研究を進めていくということを表しています。これを「パラダイム論」と呼びます。パラダイムの内部では、パラダイム自体を揺るがすような研究はあまりなされません。あくまでもパラダイム内で課題とされていることをパラダイム内の通常の手続きにしたがって解いていくことがメインとなります。

ポイントは二つあります。一つは、パラダイムという考え方が実際の科学者たちのあり方、活動のしかたに注目しているという点です。科学者は、世俗のことに関わらずに真理を追求する(カ)コウの変人というイメージは少し古いものです。実際は、論文の査読者に（乙）をつき、研究費や研究室の間関係に悩む普通の人たちです。言ってみれば、科学というのは理論的なものであると同時に、実際に行われる社会的な活動でもあるのです。二つ目は、自然科学的知識が正しいのは特定のパラダイム内部だけの可能性があるということですが、これはパラダイム論を極端に解釈した場合のもですが、科学は一直線に進歩していくというイメージとは違い、パラダイムごとに真理があり、現在の科学的知識も現在のパラダイムに即して正しさに過ぎない、と考える余地があります。

（河野哲也編『ゼロからはじめる哲学対話―哲学プラクティス・ハンドブック』より）

〈注〉※さきほど紹介したデカルトの考え方のプロセス……引用部に先行する箇所、デカルトの考え方が紹介されている。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は(ア) 、(イ) 、

(ウ) 、(エ) 、(オ)

(配点 各2点)

(ア)	ロウ ホウ	①	廊
(イ)	レン サ	②	差
(ウ)	ケン シヨウ	③	検
(エ)	キノ ウ	④	悩
(オ)	ココウ	⑤	孤
(ア)		①	浪
(イ)		②	鎖
(ウ)		③	佐
(エ)		④	老
(オ)		⑤	朗
(ア)		①	農
(イ)		②	兼
(ウ)		③	券
(エ)		④	件
(オ)		⑤	憲
(ア)		①	故
(イ)		②	濃
(ウ)		③	弧
(エ)		④	納
(オ)		⑤	固
(ア)		①	個
(イ)		②	農
(ウ)		③	兼
(エ)		④	濃
(オ)		⑤	固

問二 本文中の( a )～( c )に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはなら

ない。解答番号は( a ) 、( b ) 、( c )

(配点 各2点)

- ① あるいは      ② ところが      ③ なぜなら      ④ たとえば      ⑤ つまり

問三 空欄(甲)～(乙)に入るものとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は(甲) 、(乙)

(配点 各4点)

- (甲)      ① 特権的      ② 実践的      ③ 生産的      ④ 先験的      ⑤ 現代的

(乙)      ① 悪評      ② 罵声      ③ 悪態      ④ 虚勢      ⑤ 矛盾

問四 空欄 X に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 11

(配点 4点)

- ① 台風が発生する      ② 雷が頭に落ちる      ③ 星が東から昇る      ④ 月が西に沈む      ⑤ 太陽が西から昇る

問五 次の一文は、本文中の《1》～《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 12

(配点 5点)

これは自然科学に関する普及したイメージですよね。

- ① 《1》      ② 《2》      ③ 《3》      ④ 《4》      ⑤ 《5》

問六 傍線部 A 「基礎づけ主義」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 13

(配点 5点)

- ① 私たちの知識の土台となるものをめぐって「考える私」と「経験」のいずれを重視するかという議論の中から生まれた考え方で、現在の自然科学の研究法と親和的である。
- ② 最も確実な知識を根拠に次の知識を正当化することで新しい知識を導き積み上げていく考え方で、デカルトにとって最も確実な知識の土台となるものは「考える私」である。
- ③ 私たちが感覚を通して経験することは知識として最も確実で、これが私たちの知識の土台を形成しているという考え方で、現在は経験論や経験主義などと呼ばれている。
- ④ デカルトから始まった哲学的な考え方で、私たちの知識にはその確実性によってランキングがあり、確実性の高いものだけを研究の対象として扱うという考え方である。
- ⑤ 私たちが知識を得る際には理性より感覚をはじめとする経験を利用するほうが至って普通であると主張した、反デカルト主義の考え方で、現代の学問の基盤となっている。

問七 傍線部B「科学」とあるが、これに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

14

(配点 6点)

- ① 経験が科学の土台となり得るのは、「我思う故に我あり」という真理に基づき、自分の経験したことが疑えないからである。
- ② 有名な雑誌で論文が審査されているから科学は正しいと思われるのは、その雑誌が古くから存在してきたからである。
- ③ 科学においてある仮説が正しいと証明するためには、少なくとも実験を一〇〇回繰り返し、すべてで同じ結果を得る必要がある。
- ④ 科学は実験や観察をして結論を出しているので正しいと思われるが、実験や観察の結果が絶対確実なものとはいえない。
- ⑤ 時代が変わっても科学における正しさが変わらないのは、科学は正しいものだと思える人々が正当化してきた結果である。

問八 本文の内容と合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

15

(配点 6点)

- ① 現代社会で科学の影響力は強く、ある信念が「非科学的だ」と判断されれば、真理や知識に値しないものだと思なされることがある。
- ② 反証主義の考え方では、実際に反証されているか否かに関わらず、反証可能性が担保されていなければ科学でないことになる。
- ③ ある事柄の反対が証明される可能性を考えることによって、その時代や分野に支配的な考え方や枠組が明らかになる。
- ④ パラダイムという考え方では、科学は理論的なものであると同時に、人間による社会的な活動であることにも注目する。
- ⑤ パラダイム自体を揺るがす研究はその内部ではまれで、自然科学的知識は特定のパラダイムの内部だけで正しい可能性がある。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

戦後音楽教育において、「情操」という概念は、学習指導要領において常に目標の一つとされてきた。この「情操」という概念を目標に教育実践がなされることもあれば、逆に批判の(ア)ウキ目にあうこともあり、それは今も昔も変わらない。それでもこの「情操」という目標が音楽教育からなくなる気配は未だ見られない。それは、学校で音楽が教えられる限り、人間性の向上という究極目標から逃れることはできない、という限界を示しているといえるだろう。音楽が学校で教えられる限り、それは人間性を高めること、つまり「情操」を高めることにつながっていなければならない。音楽教育は、ただ音楽の技術や知識を教えるだけでなく、そこに教育的要素、すなわち「情操」を高めることが求められることになる。《1》

ただ、そもそものようにして「情操」が高まった、または深まった、あるいは音楽教育のおかげで「良い子」に育った、ということがわかるのか。さらにいえば、音楽教育で取り扱われるべき「教育音楽」にふさわしい音楽というのも一様ではない。それを一体誰がどのような基準で判断するのかは明確ではないし、また明確にするべきでもない。「情操」とはどこまでも曖昧な雰囲気のようなものままで、使う人にとって微妙に意味が変わるもので、誤解を恐れずにいえば、使い勝手の良い概念である。しかし、それだからこそ音楽教育は情操教育であることで自身の立場を教育の世界で(イ)イジできたのではないだろうか。すなわち、戦後音楽教育は「情操」という曖昧な概念をうまく利用することで存在しえた——これが本書の結論である。《2》

このように考えると、A学校で行われる音楽教育に対する「学校唱歌、校門を出ず」という批判は至極真つ当な意見ではあるものの、それだけでは物事の一面しか捉えていないともいえる。(a)、学校音楽教育は「教育音楽」として、そもそも校門「内」あるいは学校という制度の中で歌う、あるいは演奏すること、鑑賞されることを想定した教材を多く採用しているからである。音楽教育では「俗悪」とされる流行歌やCMソングから子どもたちを守ろうとする動きが過去にあったし、またその影響力の差はあるにせよ、今もそうした傾向は残っている。つまり、校門の「外」から「内」に入ってくる教材も、歌詞は当たり障りのないものが選ばれるなど、学校の中で使用するに耐えうる内容に

X
---

ことでいわば最大公約的な教材、つまり「教育音楽」となる。

これらの事実を、音楽が学校教育として存在するためには必要なことであり、また自らあえて選んでいる道筋でもある。「教育音楽」の特徴は、情操教育をベースにしている点にあり、音楽教育が学校の中で行われる限り、「情操」という桎梏から逃れることはできない。音楽教育のこれからについて考えていくためには、まずこうした事実を認識する必要がある。

音楽教育は人間形成に役立つ——そう自らを位置付けることで音楽科は戦後も教科としての位置を保持し続けてきた。繰り返しになるが、それだからこそこれまで何度も音楽教育は批判されてきたし、議論を巻き起こしてきた。本書で取り上げた通り、「音楽そのものを教えるのか、それとも音楽による人

間形成を重視するのか」や「音楽教育において大切なのは技術なのか、それとも子どもたちが感動する心を養うことなのか」あるいは「音楽は目的かそれとも手段なのか」といった問題は、これまでも音楽教育の世界では再三にわたって議論されてきた。《3》

これは畢竟、音楽を純粹なもの、音楽を「音楽そのもの」として捉えるかどうか、という美学的な問いに収斂する。音楽を純粹なものとして捉えようとする立場とは、「音楽そのもの」ではなく、それ以外の要素、ここでは人間性の向上や感動といった教育に役立ちそうな要素を音楽外的なものとして重視しない、極端な場合には Y 立場である。音楽を自律した作品とみなし、音楽における形式を重視する考え方というのは、一九世紀以降、ロマン主義芸術の勃興とともに (ウ) ジョウセイされ、特に音という現象を取り扱う音楽において今も根強く信奉されている。

しかし、こうした考え方というのはあくまでごく一時期のクラシック音楽、具体的にはベートーヴェンの時代の音楽を頂点とする西洋芸術音楽を論じるための枠組みの一つであり、これを一般化して論じるには無理がある。また、ベートーヴェンの作品であったとしても、そもそもそれを歴史的な文脈や前提となる知識から全く切り離して論じることは難しいのではないか。

( b )、だからといって音楽教育において音楽以外のことをさら重視することにも注意しなければならない。皆が演奏する中で協調性を育む。皆で一つの歌を歌い団結する。あるいは音楽を享受したり、音楽を自ら演奏することで感動したり皆と感動を共有したりすること。こうしたことは誰もが何らかの形で経験したことがあるだろうし、音楽にこうした効果があることは誰も否定できないだろう。《4》

結局のところ、音楽教育において必要なこととは、まずその教育的効果について自覚的になることであろう。音楽はそれが教育である限り目的でもあり手段でもある。「どちらか」ではなく、「どちらも」なのである。ただし手段とする場合にも、その取り扱いにはくれぐれも注意することが重要である。

友だちとアンサンブルをして協調性を養うとか、パートリーダーになって責任を持って取り組むとか、または合唱曲を歌う中で心が洗われるような気分になったり、一体感とともに感動する気持ちを感じたりすることは日常的にあるだろうし、これらは音楽が孕む教育的側面である。ただし、音楽教育に携わる者は、そうした音楽の教育的側面が過度に重んじられたり音楽を演奏することが 傍に置かれたりする瞬間に敏感でなければならぬ。

また、音楽の教育的側面を享受するために必要となる音楽は人によって異なるだろう。

- |   |  |
|---|--|
| a | 弦楽四重奏やオーケストラがフィットする子どももいれば、ロックバンドの方がじっくりくる人もいるだろうし、アカペラグループかあるいは邦楽や諸民族の音楽かもしれない。 |
| b | 「音楽」という概念がカバーする範囲は常にアップデートされ続けるもの、という態度を忘れないこと。                                  |
| c | ありきたりかもしれないが、以上が音楽教育に必要な態度である。   |
| d | できる限り「開かれた音楽性」を持つておくこと。  |

e 楽器が演奏できなくとも、ラップトップで自分の好きな音楽を創造するかもしれない。

最後にこれまでの議論を踏まえた上で、<sup>c</sup>今後の音楽教育のあり方について若干の提言をすることで本書のまとめとしたい。

日本の音楽教育は、戦前から現在までを通観すれば、少しずつその対象範囲を広げてきたことがわかる。唱歌に始まり、西洋芸術音楽から流行歌、最近ではポピュラー音楽が吹奏楽に編曲され、さらには軽音楽部などがクラブ活動として社会に広く認知されていることから、<sup>ちまた</sup>巷の音楽は、人間形成に役立つもの、つまり情操教育というフィルターを通すことで学校現場に取り入れられた上で「教育音楽」となっている。こうした状況をネガティブに捉えるなら、「教育音楽」の範囲は狭い、極めて限られた範囲しか取り扱っていないといえるだろう。しかし、ポジティブに捉えるなら、これまで狭い範囲、言い換えるなら情操教育として、正しい音楽のみを取り扱う傾向にある「教育音楽」が、少しずつその裾野を広げているともいえる。

では、これから音楽教育に携わる者に求められることというのはいかなるものなのだろうか。先ほど述べた通り、まずは「教育音楽」という概念を念頭において、日本の音楽教育を捉えることである。そしてそうした前提に立った上で、「教育音楽」という枠を地道に少しずつ広げていくことではないか。

また、こうした考え方は、近年研究が進む「学校音楽文化」<sup>矢野の</sup>（<sup>矢野</sup>2024）という考え方にもつながっていく。「学校音楽文化」とは、学校で行われる音楽活動を、学校という独自の場で行われる独自の音楽文化として捉えるということ、つまり、これまで批判されることが多かった校門の「内」を、独自の音楽文化が形成される場として捉えようとする試みのことである。校門の「内」で行われてきた「教育音楽」は、独自の文化あるいは価値を持つものとして捉えるという視点は、これからの音楽教育を考えるためのヒントになる。《5》

音楽で「良い子」が育てられるかどうかはわからない。しかし、学校で行われる音楽教育によって、子どもたちがより良い人生を送るための手助けはきつとできるはずだ。

（山本耕平『音楽で「良い子」は育てられるのか「情操」から読み解く音楽教育史』より。本文中の明らかな誤植と思われる箇所は修正した）

問一 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は(ア)

16、

(イ)

17、

(ウ)

18

(配点 各2点)

(ア) ウ|き目

- ① 事態をユウ|リヨする。
- ② ユウ|ゼンと構える。
- ③ 陸上部にカン|ユウする。
- ④ 温泉がユウ|シユツする。
- ⑤ ザ|ユウの銘を決める。

(イ) イ|ジ

- ① セン|イ工業を振興する。
- ② イ|ヤクキンを支払う。
- ③ 木製のイスに座る。
- ④ イ|ヒンを整理する。
- ⑤ 豊富なゴ|イを誇る。

(ウ) ジョウ|ウセイ

- ① ジョウ|ウチヨウな話に退屈する。
- ② ジョウ|ウキアツを調節する。
- ③ 薬局でジョウ|ウザイを受け取る。
- ④ 天然素材からジョウ|ウゾウする。
- ⑤ 著作権をジョウ|ウトする。

問二 本文中の（ a ）、（ b ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は（ a ） 、（ b ）

（配点 各2点）

- ① くわえて                      ② ただし                      ③ それゆえ                      ④ というのも                      ⑤ すなわち

問三 空欄  に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 4点）

- ① 創造される                      ② 提供される                      ③ 漂白される                      ④ 尊重される                      ⑤ 実施される

問四 空欄  に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 4点）

- ① 不純物として排除しようとする                      ② 教育的なものとして構築しようとする                      ③ 芸術の一部として包含しようとする  
④ 純粋な芸術として昇華しようとする                      ⑤ 未完成だとして無視しようとする

問五 次の一文は、本文中の《1》～《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 5点）

ただ、音楽を利用し、それが行き過ぎた場合にどのような結果をもたらすのかということにもまた気をつけなければならない。

- ① 《1》                      ② 《2》                      ③ 《3》                      ④ 《4》                      ⑤ 《5》

問六 本文  の中の a、e の各文を意味が通るように並べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

(配点 5点)

- ① a | b | e | d | c
- ② a | e | d | b | c
- ③ b | a | c | d | e
- ④ c | d | b | a | e
- ⑤ e | a | c | d | b

問七 傍線部 A 「学校で行われる音楽教育」とあるが、これに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

(配点 5点)

- ① 人間性を高めるという目的のために、音楽教育に適切な音楽を誰がどのような基準で判断するのかを、明確に示す必要がある。
- ② 学校教育の中で取り扱うため、大勢で歌ったり演奏したりして協調性を養うことを想定しない教材は採用されることがない。
- ③ 流行歌やCMソングはこれまで「俗悪」とされ「教育音楽」と見なされていなかったが、現在ではむしろ積極的に取り入れられている。
- ④ 音楽教育が人間性の向上という学校教育の究極目標から逃れるためには、音楽を純粹なものとして捉える美学的な視点が有効である。
- ⑤ 音楽教育には「情操」を高めるという教育的要素が求められているが、前提となる歴史的な文脈や知識から分離させるのは困難である。

問八 傍線部B「音楽教育は批判されてきた」とあるが、どのような批判があったと考えられるか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解

答番号は 

26
----

(配点 5点)

- ① 音楽は純粋な芸術であるので、自分たちで演奏するのではなく鑑賞に特化した教育をすべきだ。
- ② 音楽の技術や知識を教えることと人間形成のどちらを目標として重視するのか明確ではない。
- ③ 音楽の純粋性を強調するあまり、音楽で感動する経験が失われ、音楽嫌いを生み出している。
- ④ 西洋芸術音楽からポピュラー音楽まで、対象とする音楽の範囲が広すぎて全てを教えられない。
- ⑤ 現在の学校教育は、美術教育や書道教育といった他の芸術教育に比べて、音楽教育に偏重している。

問九 傍線部C「今後の音楽教育のあり方について若干の提言をする」とあるが、その内容として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答

番号は 27

(配点 6点)

- ① 音楽は目的でもあり手段でもあるという教育的効果に自覚的になつたうえで、「教育音楽」という枠を地道に少しずつ広げながら、合奏や合唱を通じて協調性や責任感を養うことよりも音楽の技術や知識を教えることを重視して、学校で行われる音楽教育が、子どもたちがより良い人生を送るための指針となるように工夫する。
- ② 音楽は目的であるよりむしろ手段であるという教育的効果に自覚的になつたうえで、「教育音楽」という枠を地道に少しずつ広げながら、音楽の技術や知識を教えることより合奏や合唱を通じて協調性や責任感を養うことを重視し、学校で行われる音楽教育が、子どもたちがより良い人生を送るための指針となるように工夫する。
- ③ 音楽は目的でもあり手段でもあるという教育的効果に自覚的になつたうえで、「教育音楽」という枠を地道に少しずつ広げながら、音楽の技術や知識を教えることと合奏や合唱を通じて協調性や責任感を養うことのいずれにも配慮し、学校で行われる音楽教育が、子どもたちがより良い人生を送るための手助けとなるように工夫する。
- ④ 音楽は目的であるよりむしろ手段であるという教育的効果に自覚的になつたうえで、近年の「教育音楽」に対する誤った認識を修正しつつ、音楽の技術や知識を教えることと合奏や合唱を通じて協調性や責任感を養うことのいずれにも配慮し、学校で行われる音楽教育が、子どもたちがより良い人生を送るための手助けとなるように工夫する。
- ⑤ 音楽は目的でもあり手段でもあるという教育的効果に自覚的になつたうえで、流行歌やCMソングなどの「俗悪」な音楽から子どもたちを守りつつ、教育的により良い音楽を選んで与え続けることで、学校で行われる音楽教育が、子どもたちがより良い人生を送るための指針となるように工夫する。

問十 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 

28
----

(配点 6点)

- ① 学習指導要領において常に目標の一つとされてきた「情操」という概念は、どこまでも曖昧な雰囲気のようなものそのまま曖昧な概念として温存されていたが、戦後音楽教育はこの曖昧な概念を明確にすることで存在できたと考えられる。
- ② 音楽教育が学校の中で行われる限り、「情操」という桎梏から逃れることはできないので、音楽教育は自らを人間形成に役立つものとして位置づけ、技術や知識の教育を排除することによって教科としての位置を保持し続けてきた。
- ③ ベートーヴェンの時代の音楽を頂点とする西洋芸術音楽を論じるための枠組みが、一九世紀以降、ロマン主義芸術の勃興とともに成立し、戦後音楽教育の理念もこれを規範としているものの、古い考え方だという理由で無視されている。
- ④ 音楽教育に期待される教育的側面の具体例として、合奏や合唱をする中で、完成度の高い楽曲について知識を得ることによって心が洗われるような気分になったり感動する気持ちを感じたりすることなどが挙げられる。
- ⑤ 近年研究が進んでいる「学校音楽文化」という考え方は、校門の「内」で行われてきた「教育音楽」を独自の文化や価値を持つものと捉えるもので、「学校唱歌、校門を出ず」という文言を否定するものではない。

国語 (実施日 1月20日) 【解答】

受験校	受験番号	フリガナ
		氏名

/ 100
-------

第1問 (配点50点)

	問一				
	1	2	3	4	5
解答	⑤	②	①	④	①
配点	2	2	2	2	2

	問二			問三	
	6	7	8	9	10
解答	④	①	⑤	①	③
配点	2	2	2	4	4

	問四	問五	問六	問七	問八
	11	12	13	14	15
解答	⑤	③	②	④	③
配点	4	5	5	6	6

第2問 (配点50点)

	問一			問二	
	16	17	18	19	20
解答	①	①	④	④	②
配点	2	2	2	2	2

	問三	問四	問五	問六	問七
	21	22	23	24	25
解答	③	①	④	②	⑤
配点	4	4	5	5	5

	問八	問九	問十
	26	27	28
解答	②	③	⑤
配点	5	6	6